

「ウナギ文」の語用論的分析(1)

— 文脈における語彙統語構造の発展と拡張 —

高 本 條 治*

(平成7年4月28日受理)

要 旨

ウナギ料理を注文する際に使われるとされる「ぼくはウナギだ。」という文(いわゆる「ウナギ文」)は、多くの日本語文法研究者の関心を集めてきた。ウナギ文に関する記述や説明は、当初は統語論の領域で繰り返し広げられ、その後、語用論の領域へと徐々に移行してきている。このウナギ文の文法化の問題について、語用論的な観点から継続的に論述していきたいと考えるが、本稿では、どのような観点からウナギ文を考察するかを明らかにし、「ぼくはウナギだ」という文に対して、先行研究がどのようなパラフレーズを行っているかを振り返る。

KEY WORDS

<i>unagi</i> -sentence	ウナギ文	grammaticalization	文法化
structural expansion	構造拡張	structural preservation	構造保持

1. どのような観点からウナギ文を見るか

食堂などで料理を注文する際に、次のような文が発話¹⁾として使用される可能性がある。

- (1) a. ぼくはウナギだ。
b. わたしはタヌキよ。

このようなタイプの文は、日本語文法研究の中で、「ウナギ文」²⁾と呼ばれてきた。

日本語研究の中でのウナギ文の取り扱いに関して、土屋(1992)に、次のような記述³⁾が見られる。

- (2) 「ぼくはうなぎだ」という文は、国語学者にとっては日本語の真相にせまる貴重な例文であるが、言語学者にとってはごく周辺的な「語用論的」事実であり、日本語学者にとっては外国人に教えたくない日本語の用例である。

もちろん、「日本語の真相にせまる貴重な例文」というのは、皮肉のこもった表現であるわけだが、ウナギ文に対して、日本語文法研究者の並々ならぬ関心が寄せられ、多くの研究成果が発表されてきた⁴⁾のは事実である。

それらは、いくつかのグループに分けられるという見解がある。奥津(1981)は、その時点までの先行研究を、「述語代用説」、「ノダ説」、「コピュラ説」、「分裂文説」の4種に区分している。また、沼田(1987)では、「述語代用説」、「省略説」、「コピュラ説」、「『のだ』説」、「分裂

* 言語系教育講座

文説」の5種に区分している。その他、自称・他称を合わせると、ウナギ文の先行研究には、多くの「～説」が存在する。このことは、ウナギ文の記述・説明に関して、多様な見方が可能であるという事実を示している。

ところで、ウナギ文の先行研究を振り返る際に、留意しておかなくてはならないことが2つあるように思われる。一つは、ウナギ文についての記述・説明は、その議論を一定の文脈の中で進めてきたという点である。例えば、「ぼくはウナギだ」という文は、ある時は「君は何を食べる？」という質問に対する答として、また、ある時は、料理店でうなぎ料理を注文する際の発話として、問題にされてきた。一定の文脈の枠の中で、「ぼくはウナギだ」という言語形式が議論されてきたわけである。

もう一つは、ウナギ文という通称が物語っている通り、「NP₁はNP₂だ」という統語構造を抽象化して問題にしているというよりは、NP₁・NP₂の位置が、一定の意味関係をもつ語彙実体で占められている場合を優先的に問題にしてきたという点である。特に、通常一般の「NP₁はNP₂だ」と平行的な理解をしたのでは、いささか奇異な読みになってしまうような意味関係をもつ語彙実体によって、NP₁とNP₂の位置が占められているような例文（「ぼくはウナギだ」「私はタヌキよ」「妹は坊ちゃんだ」など）が、格好のウナギ文の「典型例」とされてきた。

つまり、ウナギ文に関する議論は、純粹に統語構造のみにしぼっての議論であったとは言いにくい面をもっているということである。そこでは、常に、ある範囲に文脈を局限することによって、構造と運用の両側面が同時に問題にされてきたし、また、ある範囲の語彙実体がすでに挿入された構造体が問題にされてきた。ウナギ文についての従来の議論が、こういう点について、十分な共通理解をもっていたとは必ずしも言い難い。

「ぼくはウナギだ」という語彙統語構造について問題にする場合には、まず、

- ・この語彙統語構造をもつ発話が、実際の場面で運用される場合、どのような発話行為が遂行され、どのような文脈特性がそれに関わっているのか。

という点を押さえた上で、

- ・そのうち、どの程度までが、この語彙統語構造（すなわち「ぼくはウナギだ」という言語形式）にコード化されていると見なせるのか。

という点に振り返って考察を進めていく必要があるように思われる。

このことは、「ぼくはウナギだ」という語彙統語構造をコード解読することによって得られる意味内容と、特定場面で「ぼくはウナギだ」という発話によって相手に伝えられる意味内容とが、どの程度一致しているのかを問うことである。前者は、この言語形式に文法化⁵⁾されていると見なすことのできる内容であり、また同時に、この言語形式が明示的に伝達している⁶⁾と見なすことのできる内容である。後者には、聞き手や読み手が文脈情報を用いた推論を行うことによって、初めて得ることのできる非明示的な内容も含まれる。

語彙統語構造の形式的な側面から分析を始めて、そこに表示される意味内容が、それとは別の構造によって表示される意味内容とどのように弁別されるのかという問題に迫っていくのが統語論のアプローチだとすれば、どのような意味内容が実際に伝達されたのか、あるいは、されるのかを第一に考え、そこから分析をスタートして、それと形式的な構造との関係を考察するのが、語用論のアプローチ方法であると言えるだろう。次節で触れるように、ウナギ文に関して、語用論的なアプローチをとった論考も少なくない。ただ、そのいくつかは、自説を、統語論的なアプローチに対する代案として提示するにとどまっているようにも思われる。もし、

どちらか一方のアプローチのみが正しいというような発想があるとすると、それは残念なことである。ウナギ文の問題だけにとどまらず、この二つのアプローチは、互いにその成果を検証し合い、また、螺旋的に互いの成果を取り入れることによって、さらに錬磨されていく必要があると考えられるからである。

そこで、ウナギ文に関する先行研究を概観するとき、単に諸説を分類したり、その優劣を判定したりすることは当面避けたいと思う。つまり、

- ・ウナギ文に関する諸説が、どのような影響関係のもとに進展してきたか。
- ・ウナギ文に関する諸説のうち、どれが最も優れた妥当性をもっているか。

ということには必要以上の関心を向けず、むしろ、

- ・ウナギ文に関する諸説は、ウナギ文発話を取り巻く文脈特性が、ウナギ文の語彙統語構造にどのように（あるいはどの程度まで）文法化されていると見て、説明を行ってきたのか。

という方面に注意を払っていきたい。そのために、私は、先行研究について、一つの着目点を設定し、それを考察の入り口としたいと思っている⁷⁾。

着目点というのは、

- ・ウナギ文に関する諸説は、その記述・説明の中で、ウナギ文をどのようにパラフレーズしているか。

という点である。ウナギ文に関する記述・説明には、ウナギ文についての次のようなパラフレーズを含むものが多い（Pをパラフレーズの表現とする）。

- (3) a. Pのある部分を省略したのが、ウナギ文である。
 b. ウナギ文は、Pを縮約した表現である。
 c. Pを変形した結果として、ウナギ文が派生される。
 d. ウナギ文によって、Pという内容が伝達される。
 e. ウナギ文は、Pという形式に復元することができる。

次節では、おおよそ発表年順になるように、ウナギ文に関する主要な先行研究を追いながら、その中で、どのようなパラフレーズが行われているのかを見る（一部、次号掲載予定の小論にまたがる）。

2. ウナギ文に関する先行研究

2-1 金田一（1955）の考え方

金田一（1955）は、

- (4) ダの用法中、注意すべきものは、長い句を、「意味の上で根幹をなす名詞+ダ」で表現する手法で、(中略)「君ワ何オ食ベル?」に対して「ボクワウナギオ食ウ」と答へる代りに、「ボクワウナギダ」と短く言へるがごときである。(p. 188)

と述べている。「ぼくはウナギだ」という発話が、

- (5) ぼくはウナギを食う

という内容を伝えるという見解である。

2-2 三上 (1955) の考え方

三上 (1955) は、ウナギ文の構造を「端折り」という用語で捉え、次のように述べる。

- (6) 端折りというのは、たとえば食堂で「僕ハウナギ(ダ)」と言うような言方で、この簡略法は日常ずいぶん広く使われている。

僕ハウナギガ食ベタイノダ

僕ノ食ベタイノハウナギダ

どっちが縮まったものとしてもいいが、前者の端折りと見る方が有望である。(pp. 247-8)

2-3 三上 (1960) の考え方

さらに、三上 (1960) には、次のように「短絡」という用語も使用されている。

- (7) よくお眼にかかる短絡は、例の

僕ハ、ウドンダ。

である。かりに「注文」が抜けて短絡が起こったものとすれば、次の二通りの回復(解釈)が可能である。

(イ)僕ハ、ウドンヲ注文スル。

(ロ)僕ノ注文ハ、ウドンダ。

(イ)が自然だと思うが、(ロ)も捨てられない。(p. 264)

したがって「ぼくはウナギだ」の場合には、次のように「回復」されることになる。

- (8) a. ぼくはウナギを注文する
b. ぼくの注文はウナギだ

2-4 国立国語研究所 (1963) の考え方

国立国語研究所 (1963) でも、三上 (1955) と同様に、ウナギ文の「構文上の特徴」を「はしより」と仮称した上で、次のように述べている。

- (9) はしよりと名づけたのは、この表現が「ボクハ ウナギヲ タベタイ。」「ボクハ ウナギヲ 注文スル。」「ボクハ ウナギニ キメタ。」などの末尾の用言的な表現をはしよった表現として起こるばあいが多いからである。(pp. 168-9)

2-5 山口 (1965) の考え方

山口 (1965) は、

- (10) 一般に体言 T, T' による T ハ T' ダ構文は、 $T=T'$ と $T \neq T'$ との両解釈を許す構造的多義文と解される。(p. 37)

とした上で、

- (11) この種の構文は一般に $T=T'$ と $T \neq x=T'$ とも解され、この x を求めることが解釈上の課題となる。(p. 38)

と述べている。この考え方に基づいて、「ぼくはうなぎだ」は、次のような変形過程⁹⁾を経て得られるのだと主張している。

- (12) ぼくの注文がうなぎだ (注文=うなぎ)

—①→ 注文はぼくがうなぎだ

- ②→ ぼくがうなぎだ (ぼく≠うなぎ)
 —③→ ぼくはうなぎだ (//)

また、「ぼくのほしいのがうなぎだ」を初発とする変形によっても、「ぼくはうなぎだ」を同様に導くことができるとしている。

変形⁹⁾の過程によって、ウナギ文の派生を段階的に説明する見方は、山口(1965)以降、後述するように、Muraki(1974)、川本(1976)、奥津(1978, 1983)、北原(1981, 1984)などでも採用されている。ウナギ文を派生する変形過程は、これを逆にたどれば、ウナギ文に対する構造拡張の過程としても見る点ができるのは、興味深い。変形過程では初発の「基底構造」であった表示形式は、拡張過程においては、語彙的・統語的に発展・拡張された(すなわち意味的にも構造的にもより整備された)表示形式になっているわけである。私は、このような観点に立って、変形によるウナギ文の説明で用いられる初発の表示形式は、ウナギ文によって実際に伝えられる内容を言語化した形式に相当するという見方を採りたいと思う。

2-6 大久保(1973)の考え方

大久保(1973)は、ウナギ文を「一種のヨジレ文」(p. 82)として、次の2つの文が、「とちゅうで切れて、別の文脈とつながって一つの文になった」ものだとして説明する。

- (13) a. ぼくは・ウナギにする
 b. ぼくの注文は・ウナギだ

「ぼくはウナギだ」によって伝えられる内容を仮に言語化した場合、aのようになるか、bのようになるかは、不定ということであろう。

2-7 Muraki(1974)の考え方

Muraki(1974)では、b-①の基底構造に対する変形の結果、aの構造が導出される¹⁰⁾と主張されている(p. 54)。

- (14) a. Kinoo-wa unāgi-da.
 b. Kinoo Mary-ga unāgi-o tabe-ta ①
 → Kinoo-wa_v unāgi-o ②
 → Kinoo-wa unāgi-o-da ③
 → Kinoo-wa unāgi-da ④

これに従えば、「ぼくがウナギを食べる」という基底構造から、次のような変形過程を経て、「ぼくはウナギだ」が導出されることになる。

- (15) ぼくがウナギを食べる。
 ↓
 ぼくはウナギを φ
 ↓
 ぼくはウナギをだ
 ↓
 ぼくはウナギだ

2-8 Martin (1975) の考え方

Martin(1975)は、ウナギ文は、埋め込み要素の省略として説明できると述べている(p. 228)。すなわち、「私はウナギだ」という表現は、

(16) 私はウナギ [を注文したの] だ

から「を注文したの」の部分を省略することで得られ、その省略の印として「だ」という繫辞(copula)が代用述語(propredication)として使用されている¹¹⁾のだとする(p. 239)。

2-9 川本 (1976) の考え方

川本(1976)は、「象の鼻が長い」という文から、変形によって「象は鼻が長い」「象が、鼻が長い」という文が得られるという見方に立って、ウナギ文についても同様の説明を行っている。それによれば、ウナギ文は次のような変形過程によって得られるとされる(p. 72)。

- (17) a. 僕の(あれが)ウナギだ
 b. →僕は(あれが)ウナギだ
 c. →僕はウナギだ

このとき、最終的には表現されない「(あれが)」は、言語外の文脈であるとされる。

2-10 奥津 (1978) の考え方

奥津(1978)は、Martin(1975)と同じく、ウナギ文の「だ」によって述語が「代用」されていると見る。奥津は、ウナギ文の構造が得られる過程を次のような変形過程として説明している。

- (18) a. ボクハ ウナギヲ tabe -ru →
 b. ボクハ ウナギヲ d -a →
 c. ボクハ ウナギ ダ

bは、aに対して「『ダ』ニヨル述語ノ代用」(p. 43)という任意の変形規則¹²⁾を適用することによって得られるもので、

- (19) 「食ベル」の未完了時制詞 -ru はそのまま「ダ」の中に残り、ただしその形が-aに変わる。(p. 54)

とされている。このとき、「ダ」は、「他の用言を代用し文の成立にとって必要な述語の働きのみを持つ」(p. 22)というのが、奥津の主張である。なお、cは、bに対して「格助詞ノ消去」という任意の変形規則(p. 23)を適用することによって得られるとされている。

また、奥津(1983)では、次のような法制要素をもつ場合も、同様の変形過程で説明されている(p. 232)。

- (20) a. ボクハ ウナギガ 食ベタ -イ →
 b. ボクハ ウナギ d -a

2-11 久野 (1978) の考え方

久野(1978)では、「どこで生まれたの?」に対する「東京だ。」のような構文を「『ダ』パターン」と呼ぶ。「ダ」パターンは、次のような「談話法的制約」をもっているとされる(p. 82)。

- (21) 「ダ」パターンは、省略される要素が復元可能であるばかりでなく、先行する文で既知の古いインフォーメーションになっている場合にのみ使用できる。

ウナギ文は、「『ダ』パターンの用法の典型的なもの」であるとされ、次のように説明されている。

(22) 「僕ハウナギダ」は、

僕ハ、ウナギヲ注文スル。

の「僕ハ」と「ウナギ」に文の資格を与えるため、「ダ」が附加されて出来上った文と仮定する。(p. 92)

2-12 川合 (1978) の考え方

川合 (1978) は、ウナギ文は「場にあって必要なものだけを残し他の部分を省略していく」ことによって得られたものであるとする。その上で、「私はウナギだ」が何を省略したものか、その「源流」を探ってみる場合、例えば、「君は何にするか。」というレストランでの問を想定すると、次のような完全形式 (full form) が考えられると指摘している。(p. 175)。

- (23) 1) 私 (が注文したいもの) はウナギだ。
 2) 私 (について言えば、食べたいの) はウナギだ。
 3) 私はウナギ (を食べることにするの) だ。
 4) 私はウナギ (を注文したいの) だ。
 5) 私はウナギにする。(?)

しかし、川合はこの直後に、次のように述べている。

- (24) こうした文はいくつも考えられ、その作業は不毛の観を呈するが、それはつまり「私はウナギだ」の full form を求める事が見当違いのことだからであると思われる。特に 5) などはウナギ文とは全く異構造の異文としか言いようがない。(p. 175)

ウナギ文が、この表現形式で「過不足なく意図を伝達している」以上、「完全形式」を求めることは、「不毛」であり「見当違い」であると言うのである。しかし、(23) のパラフレーズの一つ一つについて、「ぼくはウナギだ」が実際に伝える内容を言語化したものであると見なすことは可能だろう。

2-13 森岡 (1980) の考え方

森岡 (1980) は、「うなぎ。」という表現が、料理を注文する場合、「何を注文なさいですか。」という質問に対する「質問の焦点だけ」を明示した、「必要最少限の情報伝達」となることを指摘する。これに、「だ」を付けた「だ構文」に、「『他の人はともかく、ぼくが注文するのは』という文脈が入ってきた縮小表現」が、「ぼくはウナギだ。」という文であると言う。また、森岡は、ウナギ文に対して、

(25) ぼく [が注文するの] はウナギだ。

という「省略」を認めている。

したがって、森岡の考えかたをまとめれば、次のように表すことができるだろう。

(26) [他の人はともかく] ぼく [が注文するの] はウナギだ。

2-14 仁田 (1980) の考え方

仁田 (1980) は、「XハYダ。」という文が示す「意味関係のあり方」を「帰属型」($X < Y$) と「等価型」($X = Y$) に分け、その両者の意味関係をまとめて「 $X \leq Y$ 」という式で表す。その

上で、ウナギ文の解釈について、次のように述べる。

- (27) 「僕ハウナギダ。」といった文を、〔僕ノ注文スルモノハウナギダ。〕（〔僕ハウナギヲ注文スル。〕）や〔僕ガ食ベルノハウナギダ。〕（〔僕ハウナギヲ食ベル。〕）のように意味解釈したり、「妹ハ男ダ。」を、〔妹ガ生ンダノハ男ダ。〕（〔妹ハ男ヲ生ンダ。〕）や〔妹ガホシイノハ男ダ。〕（〔妹ハ男ガホシイ。〕）のように意味解釈するようになるのは、「XハYダ。」において、「X」と「Y」との有している語義の相互関係のあり方からして、 $X \leq Y$ といった意味関係の通常での成立が阻害されることによる。（p. 157）

仁田によれば、解釈者は「能動的な精神の作用」を発揮して、「その『X』と『Y』の相互関係を何とか『 $X \leq Y$ 』で意味解釈しよう」とする。もちろん、一意的な意味解釈を行うためには、「解釈者が文脈や場面を把握しうること」という条件が必要になる。しかし、仁田は、文脈や場面がない場合も含めて、「XハYダ。」という文が「 $X \leq Y$ 」という意味関係を表す文であることと、それに応じて解釈者が「X」と「Y」との相互関係のあり方を「測定する」こととが、ウナギ文解釈の「契機」あるいは「引き金」になっているのだと述べている。

仁田の主張をある程度一般化すれば、発話の構造や形式は、発話の意味に対する推論のありかたを方向づけ、また、動機づけるということになる。「ぼくはウナギだ。」という発話に対する解釈結果の表示形式としては、「ぼくの食べたいのはウナギだ。」とか「ぼくはウナギが食べたいのだ。」のように、もとの発話が有していた「XはYだ」という構造特徴を保持した形式が好まれる傾向があるのは、そのためであろう。すなわち、発話の解釈の際に行われる推論は、発話の構造や形式を引き金として動機づけられているために、解釈された発話の意味内容を言語によって再コード化した形式（解釈記録形式¹³⁾）は、もとの発話の構造をある程度保持したものになりやすい、ということである。

2-15 北原（1980, 1981）の考え方

北原（1980）は奥津（1978）の紹介文であるが、この中でウナギ文は「分裂文」から派生されたものであるという代案が提示されている。その考えは北原（1981）に引き継がれ¹⁴⁾、ウナギ文の成立を次のような変形過程として説明している（p. 293）。

- (28) ぼくが うなぎが 食べたい
 ↓
 ぼくが食べたいのは うなぎだ
 ↓
 ぼくののは うなぎだ
 ↓
 ぼくのは うなぎだ
 ↓
 ぼくは うなぎだ

2-16 尾上（1981b, 1982）の考え方

尾上（1981b）では、ウナギ文と助詞「は」の関わりについて、次のような記述を行っている。

- (29) 助詞「は」は A と B の間の関係そのものについては何ごとにも述べない。ただ、A と B が結合されて一つの事態が成立することを主張するだけである。そこでは AB の二者がか

け離れたものであればあるほどモンタージュの効果は高まり、「は」の表現力は強く意識される。「ぼくはウナギを食べる」「ぼくが注文するのはウナギだ」と全部言ってしまうなくても、「ぼく」と「ウナギ」とを「は」でつなぐだけで一つの意味が了解されるのである。(p. 15)

また、尾上(1982)では、「ぼくがうなぎだ」に関する論考の導入部分で、次のような表現を用いている。

- (30) このような文型で「ぼくが注文するのはうなぎである」「ぼくはうなぎにする」というような意味を表現できるのは何故であろうか、という疑問が当然あり得るが、(後略)(p. 108)

以上の尾上の記述によれば、「ぼくはウナギだ」という発話は、次のように言語化できる内容を伝えているということになる。

- (31) a. ぼくはウナギを食べる
b. ぼくが注文するのはウナギだ
c. ぼくはウナギにする

2-17 堀川(1983)の考え方

堀川(1983)は、北原(1981)の説を批判的に発展させ、また、川本(1976)の説を踏まえつつ、「分裂文を基底にした省略文こそがうなぎ文の正体」だとして、次のように述べる¹⁵⁾。

- (32) うなぎ文は「Aは、XはBだ」型の文の「Xは」が省略されたものであり、その省略文がうなぎ文としての性格をもつのは、XとBとの結合が偶然的なものであったことに起因する。

つまり、例えば、「ぼくは、食べたいのはうなぎだ」から、「食べたいのは」が省略された形式がウナギ文であるというのである。

2-18 藤田(1983)の考え方

藤田(1983)では、「事態を未分析的・直接的に指し表わす」記号を「挙示記号」と呼び、例えば、いわゆる一語文は、「現前性を帯びた挙示記号の一項単独でのあらわれ」と見なされている。

ウナギ文について、藤田は、

- (33) 「ボクハウナギだ」の「ウナギ」は「うなぎを食べる」といった事柄を直接的・未分析的に指し表わすものである(p. 32)

と見て、「ウナギ」を「挙示記号」とする。

「ぼくはウナギだ」の「ウナギ」という表現(記号)が、「事実世界」の「うなぎを食べる」という事柄を「指し表わす」という藤田の見方に従うと、ウナギ文によって伝えられる内容は、次のaまたはbのような言語形式に対応するものとなるだろう。

- (34) a. ぼくはウナギを食べる
b. ぼくはウナギを食べるのだ

2-19 北原(1984)の考え方

北原(1984)は、堀川(1983)の説を受けて、「うなぎ文の本質」を「述語の部分の主格化し

て倒置する」点にあるとした上で、次のような変形過程を導入している¹⁶⁾。

- (35)
- ① Aが B $\left\{ \begin{array}{l} \text{が} \\ \text{に} \quad \text{P} \\ \text{を} \quad \text{ナド} \end{array} \right.$
- ↓
- ② Aが Pが Bだ
- ↓
- ③ Aが Bだ
- ↓
- ④ Aは Bだ

Aを「ぼく」、Bを「うなぎ(が)」、Pを「食べたい」とすると、次のような変形過程となる。

- (26) ① ぼくが うなぎが 食べたい
- ↓
- ② ぼくが 食べたい(の)が うなぎだ
- ↓
- ③ ぼくが うなぎだ
- ↓
- ④ ぼくは うなぎだ

(以下、次号掲載分につづく¹⁷⁾)

注

- 1) 本稿では、「文」と「発話」とは区別して用いる。語彙的・統語的に適格な形式を備えた言語構造体を「文」と呼ぶ。それに対して、特定の場面・状況の中で、特定の言語使用者が、ひとりつながりの個別言語(の変種)の断片を実際に表出したとき、音声や文字を媒体として実現された、その具体的・個別的な言語表出を「発話」と呼ぶ。したがって、文脈に依存しない抽象的な構造や形式を問題にする場合には「文」を用い、実際の場面や文脈の中での具体的な使用を問題にする場合には「発話」を用いる。
- 2) 奥津(1978)において、「うなぎ文」という呼称が用いられている。北原(1981)によれば、この呼称の名付け親は奥津敬一郎氏であるとのこと。本稿では、「ウナギ文」という表記を用いる。
- 3) 原文では「語用論的」ではなく、「論用論的」となっているが、明らかな誤植だと思われるので改めた。
- 4) それぞれの時点での主要な先行研究は、奥津(1981:第3節)、島田(1983)、堀川(1983)、北原(1984)、薬(1988:第1節)、杉浦(1991:第1節)などにおいて、それぞれの論者の観点からまとめられている。
- 5) 文法化(grammaticalization)は、語用論の重要な研究課題の一つとして注目されている。しかし、この用語の内包と外延は、今のところ明確化されていない。私は、「文法」という用語が、言語の規約的な規則や体系を表す一方で、その規則や体系の記述という知的営為

の成果をも表すのに対応させて、「文法化」という用語についても、2つの意味で使用したいと思う。第一に、Levinson (1983) にならって、言語運用や発話事象に関わるさまざまな文脈特性が、語彙、統語、形態、音韻などの規約的な素性として言語形式に反映され、コード化されていることを「文法化」と呼ぶ。例えば、指示語や代名詞はダイクシス (deixis) を語彙的に文法化しており、敬語体系は、ポライトネス (politeness) という対人関係を統語的・語彙的に文法化している。第二に、何らかの言語現象を、語彙論、統語論、形態論、音韻論などの観点から抽象化して、理論的な規則や体系として記述する知的な営みのことを「文法化」と呼ぶ。特に、この後者の意味では、文法の記述・説明における「過剰な文法化 (over-grammaticalization)」という問題が、注目を集めている。

- 6) 発話によって顕在化される意味内容が、明示的であるか、非明示的であるかの区別は、Sperber & Wilson (1986) の区別に従う。
- 7) 語用論的な観点からウナギ文を見るとき、次の3点が問題にされ、また、解明なくてはならないだろう。(1)ウナギ文が使用される前提には、どのような条件が、どの程度必要か。(2)ウナギ文が伝える意味内容として、どのような内容が、どのようにして解釈されるのか。(3)ウナギ文の構造には、どのような内実が、どの程度まで文法化されているのか。これらの問題に対して、次号以降に掲載予定の小論の中で答えていくつもりである。
- 8) ①・②・③は、「① T_1 / T_2 ガ T_3 ダ → T_1 ハ T_2 ガ T_3 ダ」、「② T ハ → ϕ 」、「③ T ガ → T ハ」という変形規則 (p. 38) の適用を表している。ただし、①の右辺は、(17)の例から見て、本来、「 T_2 ハ T_1 ガ T_3 ダ」とあるべき誤植であろう。
- 9) ここでは、(1)位置転換 (permutation)、(2)付加 (adjunction)、(3)削除 (deletion)、(4)代用 (substitution) のいずれか一つ、あるいはその組み合わせを「変形」と総称している。
- 10) ①→②には「文脈削除 (contextual deletion)」と「主題化 (thematization)」、②→③には「繫辞付加 (copula attachment)」、③→④には「ガ・ヲ削除 (ga-o deletion)」と呼ばれる変形がそれぞれ加えられている。このうち、「文脈削除」は、非焦点 ([-focus]) の構成素を削除する変形操作だとされる。
- 11) やはり、「だ」を「述語代用形」と見る奥津 (1989) では、「述語を省略してしまうと、文としてまとまりが悪いので、省略された述語の位置に「だ」を置いて完結した文とするのである」(p. 198) と述べられている。ただし、奥津 (1981) は、「～のだ」から「～の」を消去する Martin (1975) の考え方は妥当でないと批判している。
- 12) この変形規則は、奥津 (1981) では、「[ダ]による述語代用化」と改称され、奥津 (1978) のものよりも、規則の適用条件をゆるめた上で、「 X Pred Tense → X d Tense」というように定式化されている。但し、 X は任意の数の「連用成分」であり、Pred (述語) は (例えば、「君は何を食べる?」という問が文脈にあるなどの)「前提」をもつ。なお、この奥津 (1981) において、奥津は自らの説を「述語代用説」と呼んでいる。
- 13) 解釈記録形式 (interpretive recording form) は、解釈によって得られた想定明示形式であり、個別言語のコード化の体系による制約を受けるため、解釈された想定内容を十全に表示できるとは限らない。なお、'recording form'は、解釈内容を再コード化することによって得られるので、're-coding form' (再コード化形式) でもある。
- 14) 北原は自らの説を「分裂文説」と名づけ、述語代用説に対する相対的優位を主張している。
- 15) 堀川は自説を「省略文型説」と命名し、ウナギ文が多義的であるのは、「場面や文脈が、省略された部分 X の代用をしている」ためであると述べている。
- 16) 北原 (1984) の説は、「部分分裂文省略説」、略して「部分分裂文説」と自称されている。

- 17) ウナギ文のバラフレーズを含む先行研究として、以上の他、安藤(1986)、薬(1988)、佐藤(1989)、杉浦(1991)、全(1992)を取り上げる予定である。

参 考 文 献

- 安藤貞雄(1986)『英語の論理・日本語の論理』,大修館書店。
 大久保忠利(1977)『新・日本文法入門 新版』,三省堂[初版1973年]。
 奥津敬一郎(1978)『「ボクハ ウナギダ」の文法一ダとノ』,くろしお出版[増補版1983年]。
 奥津敬一郎(1981)「ウナギ文はどこから来たか」,国語と国文学 58-5 [奥津(1978)の増補版(1983)に再掲]。
 奥津敬一郎(1989)「うなぎ文と『だ』の文法」,井上和子(編)『日本文法小事典』(IV-2),大修館書店。
 尾上圭介(1981a)「『は』の係助詞性と表現的機能」,国語と国文学 686。
 尾上圭介(1981b)「『象は鼻が長い』と『ぼくはウナギだ』」,月刊言語 10-2,大修館書店。
 尾上圭介(1982)「『ぼくはうなぎだ』の文はなぜ成り立つのか」,国文学一解釈と教材の研究 27-16,学燈社。
 川合淳介(1978)「省略について」,日本語学校論集 5。
 川本茂雄(1976)「日本語の文法の特徴一視点の模索」,金田一春彦(編)『日本語講座1日本語の姿』,大修館書店。
 北原保雄(1980)「奥津敬一郎著『「ボクハウナギダ」の文法一ダとノー』」(紹介),国語学 120。
 北原保雄(1981)『日本語の文法』(日本語の世界6),中央公論社。
 北原保雄(1984)「文法を考える(10)ーうなぎ文再考」,月刊国語教育 3-12,東京法令出版[北原保雄『日本語文法の焦点』(教育出版,1984年)に収録]。
 金田一春彦(1955)「日本語一文法」,市河三喜(ほか主幹)『世界言語概説 下』,研究社。
 久野 暉(1978)『談話の文法』,大修館書店。
 国立国語研究所(1963)『話しことばの文型(2)ー独話資料による研究』(国立国語研究所報告 23),秀英出版。
 佐藤定義(1989)「長女はみんな男ー提題成分・叙述成分・補充成分など」(研究余滴),相模国文 16。
 島田昌彦(1983)「『ウナギ文』論争の疑問」,金沢大学大学部論集・文学科篇 3。
 杉浦滋子(1991)「『だ』の意味ー『うなぎ文』をめぐって」,東京大学言語学論集 12。
 全 成輝(1992)「『うなぎ文』の成立についてー表現と理解のプロセス」,国語学研究 31。
 土屋 俊(1992)「言語学のあり方を問う③ー松村一登氏への質問状2」,月刊言語 21-12,大修館書店。
 仁田義雄(1980)『語彙論的統語論』,明治書院。
 沼田善子(1987)「うなぎ文」,寺村秀夫(ほか編)『ケーススタディ日本文法』,桜楓社。
 藤田保幸(1983)「『ボクハウナギダ』の解釈について」,語文42。
 堀川 昇(1983)「『僕はうなぎだ』型の文について一言の省略」,実践国文学 24。
 三上 章(1955)『現代語法新説』,刀江書院[復刊:くろしお出版,1972年]。
 三上 章(1958)「主語と述語」,『日本文法講座5』,明治書院[三上(1975)所収]。

- 三上 章 (1960) 『『象の鼻』をめぐって』, 文学論藻 18 [三上 (1975) 所収].
- 三上 章 (1975) 『三上章論文集』, くろしお出版.
- 森岡健二 (1980) 「伝達論からみた省略」, 言語生活 339 [森岡健二『文法の記述』(明治書院, 1988年)に収録]
- 薬 進 (1988) 『『ほくはうなぎだ』型の文を考える一主題の隠形化』, 日本語学 7-6, 明治書院.
- 山口 光 (1965) 「ほくはうなぎだ—その変形文法的一解釈」(第九回研究発表会発表要旨), 計量国語学 35.
- Levinson, S. C. 1983. *Pragmatics*. Cambridge University Press. [邦訳: 安井稔 (ほか訳) 『英語語用論』(研究社出版, 1990年)]
- Martin, S. E. 1975. *A Reference Grammar of Japanese*. Yale University. [Republished: Rutland, Vermont and Tokyo: Charles E. Tuttle, 1988.]
- Muraki, M. (村木正武) 1974. *Presupposition and Thematization*. Tokyo: Kaitakusha.
- Sperber, D. and D. Wilson. (1986). *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell.

A Pragmatic Analysis of So-called *Unagi*-sentence (1) Contextual Development and Expansion of Lexico-syntactic Structure

Joji TAKAMOTO *

ABSTRACT

The sentence type such as '*Boku wa unagi da.*' ('As for me, an eel.') which we may use in a restaurant to order broiled eel has been called the term of '*unagi*-sentence' by Japanese grammarians. The study of *unagi*-sentence seems to have been shifted from the field of syntax to the field of pragmatics, gradually.

I will argue the problem of 'grammaticalization' of this sentence type successively from the view point of linguistic pragmatics. In this paper, I mention the standpoint of my serial arguments about *unagi*-sentence, and review several preceding studies with a view to investigating their ways of paraphrasing for *unagi*-sentence.

* Division of Language, Department of Japanese Language